**〔解　説〕**竹田出雲、三好松洛、並木千柳の合作。延享四年（一七四七）大坂竹本座初演。全五段の時代物。この作品は「仮名手本忠臣蔵」「菅原伝授手習鑑」と共に浄瑠璃の三大傑作とされています。義経伝説の堀川夜討ち、大物浦、吉野落ちの三事件を骨子とし、そこに壇ノ浦での平家滅亡に際して死んだとされた知盛(とももり)、維盛(これもり)、教経(のりつね)が、実は生きていて源氏に復讐しようとする筋がからませてあります。

**三段目**＝維盛の妻子、若葉の内侍(ないし)と若君六代(ろくだい)君は、主馬小金吾(しゅめのこきんご)の供で高野を目指しますが、途中でいがみの権太に金を騙し取られてしまいます。内侍らに源氏の討手がかかり、小金吾は討ち死にしますが、そこへ通りかかった鮓屋の弥左衛門が何を思ったか小金吾の首を切って持ち帰ります。

**〔すしやの段〕**弥左衛門はその昔、平重盛に恩を受けた身であったため、維盛を奉公人の弥助として匿っていました。事情を知らない娘のお里は、弥助と夫婦になることを望んでいましたが、追われた内侍と若君が鮓屋に逃げ込むと、事情を理解し、三人を逃がします。母親に金の無心をしようと忍び込んでいた権太が褒美目当てに跡を追います。弥左衛門は討手の梶原に偽首の入った鮓桶を出しますが、その中に会ったのは権太が母親から騙し取った金でした。そこへ権太が首の入った鮓桶を梶原に差し出して、褒美の羽織を受け取りますが、激怒した弥左衛門は権太を刺します。権太は苦しい息の下で、首は小金吾のもの、内侍と若君は自分の妻子であったと父に告げるのでした。

※演者・時間等の都合により多少の異同がございます。　　　　　　　　　　　(一般社団法人　義太夫協会発行)

**すしやの段**

　春は来ねども花咲かす、娘が漬けた鮓ならば、なれがよかろと買ひにくる。風味も吉野、下市に売り広めたる所の名物、釣瓶鮓屋の弥左衛門、留守のうちにも商売に、抜け目も内儀がはや漬に、娘お里が片襷、裾に前垂ほや〳〵と、愛に愛持つ鮎の酢、押さへてしめてなれさする、うまい盛りの振紬が、釣瓶鮓とはものらしゝ。締木に栓を打ち込んで、桶片付けて、

「申し母様、昨日父様の言はしやるには、明日の晩には内の弥助と祝言さす程に、世間晴れて女夫になれと仰つたが、日が暮れてもお帰りないは、嘘かいなア」

「オヽあの言やることはいの。なんの嘘であらうぞ。器量のよいを見込みに熊野参りから連れて戻つて、気も心も知ると弥助といふわが名を譲り、は弥左衛門と改めて内の事任せて置かしやるは、そなたとはす兼ねての心。今日は俄に役所から親父殿を呼びに来て思はぬ隙入り。もふ迎ひにやろにも人はなし」

「サイナア、折悪ふ弥助殿も方々から鮓の誂へ、仕込みの桶が足るまいと、空き桶取りに往かれましたが、もふ戻らるゝでござんしよ」

と、噂半ばへ明桶荷ひ戻る男のとりなりも、利口で伊達で色も香も知る人ぞ知る、娘が好いたに着せても憎からず。内へ入る間も待ち兼ねて、お里は嬉しく、

「アレ弥助様の戻らんした。待ち兼ねた遅かつた。もしやどこぞへ寄つてかと、気が廻つた案じた」

と、女房顔して言ふて見る、さすが鮓屋の娘とて、早い馴れとぞ見えにける。母はにこ〳〵笑ひを含み、

「イヤコレ弥助殿、気にかけて下さんな。この吉野郷は弁財天の教へによつて、夫を神とも仏とも戴いてゐよとある天女の掟。その代はり程悋気も深い。また有様は親の孫、瓜の蔓にではござらぬ」

と、言ひくろむれば、

「これはまあ却つて迷惑。段々お世話の上大切なお娘御まで下され、お礼の申し様もござりませぬ。さりながらとかくお前には弥助殿々々々と、殿付をなされてさりとては気の毒。やつぱり弥助、どふせい、かふせいとお心安う、ナ申し」

「イヤ〳〵それは赦して下され」

「ソリヤまたなぜでござります」

「さればいの。弥助といふ名はこれまで連れ合ひの呼名。殿付けせずにどふせいかふせいとは、勿体なふて言ひ難い。言ひ馴れた通り殿付けさして下され」

と、げに夫をば大切に、思ふ掟を幸ひに、娘へこれを聞けがしの母の慈悲とぞ聞こえける。お里、弥助は明桶を板間へ並べてゐる所へ、この家の惣領いがみの権太、門口よりで、

「母者人々々々」

と、言ひつゝ入ればお里はびつくり、

「アレまた兄様か、よふお出で」

と揉み手する。

「エヽきよと〳〵しい、その面なんぢやい。よふ来たがびつくりか。わりやアノ弥助とへヽうまい事してゐるさふなが、コリヤ弥助もよふ聞け。今追い出れてゐても、釜の下の灰までおれが物ぢや。今日は親父の毛虫が役所へ往たと聞いたによつて、ちと母者人に言ふ事があつて来た。二人ながら奥へ失せふ」

と、睨み廻されうぢ〳〵と、

「これに」

と言ふて立つ弥助、娘も後に引添ふて、一間へこそは入りにけれ。後に母親溜息つき、

「コリヤまた留守を考へ無心に来たか。性懲りもない腕白者、そのおのれが心から、嫁子があつても足踏み一つさす事ならぬ。聞きやこの村へ来てゐるげなが、互ひに知らねば摺れ合ふても、嫁姑の明き盲目、潰れと人々に言はれるが面目ない。エヽ不孝者め」

と目に角を、立て変はつたる機嫌にぐんにやり、直ではいかぬといがみの権、思案しかへて、

「申し母者人。今晩参つたは無心ではござりませぬ。お乞ひに参りました」

「ソリヤなんで」

「私は遠い所へ参ります程に、親父様もお前にも、随分おまめで〳〵」

と、しほれかければ母は驚き、

「遠い所とはそりやどこへ、どふした訳で何しに行く」

と、は親の騙され小口、『サアしてやつた』と目をしばたゝき、

「親の物は子の物と、お前へこそ無心申せ、つひに人の物箸、んだ事も致しませぬに、不孝の罰か、夜前私は大盗人に遭ひました」

「ヒヤア」

「その中に代官所へ上げる年貢、三貫目といふもの盗み取られ、言ひ訳もなく仕様もなく、お仕置きに合はふよりはと、覚悟極めてをりまする。情ない目に遭ひました」

と、かます袖をば顔に当て、しやくり上げても出ぬ涙、鼻が邪魔して目の縁へ、届かぬ舌ぞ恨めしき。甘い中にも分けて母親、誠と思ひ共に目を摺り、

「鬼神に横道なしと年貢の銀を盗まれ、死なふと覚悟はまだ出かした。災難に遭ふも親の罰、コリヤよふ思ひ知れよ」

「アイ〳〵、思ひ知つてはをりますけれど、どふで死なねばなりますまい」

「コリヤやい」

「あい、あい」

「常のおのれが性根故、これも衒りか知らねども、しやうぶ分けにと思ふた銀、親父殿に隠してやろ。これでほつとり根性直せ」

と、そろ〳〵戸棚へ子の蔭で、親も盗みをする母の、甘い錠さへ明け兼ねる、

「エヽつひ雁首で、こち〳〵がよござりまする」

と仕馴れたる、おのが手業を教ゆる不孝、親はわが子が可愛さに地獄の種の三貫目、後をくろめて持つて出で、

「なんぞに包んでやりたいが」

と、限りない程甘い親、

「うまいわろぢや」

といがみの権、鮓の空き桶よい入れ物、

「これへ〳〵」

と親子して、銀を漬けたる黄金鮓、蓋閉め栓締め

「サアよいは、これで目立たぬ提げて去ね」

と、親子が工合の最中へ、苦い父親弥左衝門これも疵持つ足の裏、あたふたとして門口を、

「戻った開けい」

とうち叩く、

「南無三、親父」

と内にはうろたへ廻り、

「その桶を、こゝへ〳〵」

と空き桶と共に並べて親子はひそ〳〵、奥と口とへ引き別れ、息を詰めてぞ入りにける。

神ならず仏ならねばそれぞとも知らぬ道をば行き迷ふ、若葉のは若君を宿ある方へ預け置き、『手負のことも頼まん』と思ひ寄る身も縁の端、この家を見かけ戸を打ち叩き、

「一夜の宿」

と乞ひ給へば、維盛はよい退きしほと表の方、叩くに声を寄せ、

「この内は鮓商売、宿屋ではござらぬ」

と、愛想のないが愛想となり。

「イヤこれ申し、稚きを連れた旅の女、是非に一夜」

と宣ふにぞ、

「断り言ふて帰さん」

と、戸を押し開き月影に、見れば内侍と六代君、

『ハツ』と戸をし内の様子、娘の手前もいぶかしく、そろ〳〵立ち寄り見給へば、早くも結ぶ夢の、表に内侍は不思議の思ひ、

「今のはどふやらわがに、似たと思へど、つむりも青き、よもや」

と思ひ給ふ内、戸を押し開いて維盛卿、

「若葉の内侍か、六代か」

と、宣ふ声に、

「ヒヤア、さてはわが夫」

「父様か」

「ノウなつかしや」

と取り縋り、詞はなくて三人は、泣くより他の事ぞなき。

「まづまづ内へ」

と密かに伴ひ、

「今宵は取り分け都の事、思ひ暮してゐたりしが、親子共に息災で不思議の対面、さりながら某この家にゐる事を、が知らせしぞにまた、遙々の旅の空、供連れぬも心得ず」

と、尋ね給へば若葉の君、

「都でお別れ申してより、須磨や八島のを案じ、一門残らず討死と聞く悲しさも嵯峨の奥、泣いてばつかり暮らせしに、高野とやらんにおはするといふ者のある故に、小金吾召し連れお行方を心ざす道追手に出合ひ、可愛や金吾は深手の別れ、頼みも力もない中に、廻り逢ふたは嬉しいが、中将維盛様がこのお姿は何事ぞ。袖のないこの羽織に、このおつむりは」

と取り付いて、び絶へ入り給ふにぞ、面目なさに維盛も、額に手を当て袖を当て、伏し沈みてぞおはします。涙の内にも若葉の君、伏したる娘に目を付け給ひ、

「若い女中の、殊に枕も二つあり、定めてお伽の人ならん。かくゆるかしきお暮らしなら、都の事も思し召し、風の便りもあるべきに、打ち捨て給ふは胴慾」

と恨み給へば、

「ホヽオそれも心にかゝりしかど、文の落ち散る恐れあり。わけてこの家の弥左衛門、父重盛の恩報じと、われを助けてこれまでに、重々厚き夫婦が情け。何がな一礼返礼と思ふ折柄娘の恋路、つれなく言はゞ過ちあらん。かへつて恩が仇なりと、仮の契りは結べども、女は嫉妬に大事も洩すと、弥左衛門にも口留して、わが身の上は明さず、仇な枕も親共へ、義理にこれまで契りし」

と、語り給へば伏したる娘、堪へ兼ねしか声上げて、『わつ』とばかりに泣き出す。

「コハなに故」

と驚く内侍、若君引き連れ逃げ退かんとし給へば、

「ノウこれお待ち下され」

と、涙と共にお里は駆け寄り、

「まづ〳〵これへ」

と内侍若君上座へ直し、

「私は里と申してこの家の娘。いたづら者憎い奴と、思し召されん申し訳。過ぎつる春の頃、色珍しい草中へ、絵にある様な殿御のお出で、維盛様とは露知らず女の浅い心から、可愛らしいいとしらしいと思ひ染めたが恋のもと。父も聞こえず母様も、夢にも知らして下さつたら、たとへ焦がれて死ぬればとて、雲居に近き御方へ、鮓屋の娘が惚れられふか。一生連れ添ふ殿御ぢやと、思ひ込んでゐるものを、二世の固めは叶はぬ、親への義理に契つたとは、情ないお情に預かりました」

とどうど伏し、身を震はして泣きければ。維盛卿は気の毒の、内侍も道理の詫び涙、乾く間もなき折からに、村の役人駆け来たり戸を叩いて、

「アヽコレ〳〵、こゝへ梶原様が見へまする。内掃除しておかれい」

と言ひ捨てゝ立ち帰る。人々『ハツ』と泣く目も晴れ、

「いかゞはせん」

と俄かの仰天、お里はに心付き、

「まづ〳〵親の隠居屋敷上市村へ」

と気をあせる、

「げにその事は弥左衛門、われにも教へ置きしかど、最早開かぬ平家の運命、検使を引き受け潔ふ腹掻き切らん」

と身拵へ、内侍は悲しく、

「コレ、この若のいたいけ盛りを思し召し、ひとまづこゝを」

と無理矢理に引立て給へば維盛も、子に引かさるゝ後ろ髪、是非なくその場を落ち給ふ、御運の程ぞ危ふけれ。

様子を聞いたかいがみの権太、勝手口より躍り出で、

「お触れのあつた内侍六代、維盛弥助めせしめてくれん」

と尻引つからげ駆け出すを、

「コレ待つて」

とお里は取り付き、

「兄様、これは一生の私が願ひ、見赦して下され」

と、頼めど聞かず刎ね飛ばし、

「大金になる大仕事、邪魔ひろぐな」

と縋るを蹴倒し張り飛ばし、最前置きし銀の鮓桶、

「これ忘れては」

と引提げて跡を慕ふて、追ふて行く。

「ノウとゝ様、かゝ様」

とお里が呼ぶ声弥左衛門、母も駆け出で、

「何事」

と問へば娘は、

「コレ〳〵〳〵、都から維盛様の御台若君、尋ねさ迷ひお出であり。積もる話のその中へ詮議に来ると知らせを聞き、三人連れで上市へ落としましたを情ない。兄様が開いてゐて討ち取るか討ち取るか生け捕つて褒美にするとソレ〳〵〳〵たつた今追つ駆けて」

と、言ふよりびつくり弥左衛門、

「ソレ一大事」

と嗜みの、朱鞘の脇差腰にぼつ込み駆け出す向ふへ、

「ハイ〳〵〳〵」

との提灯梶原平三景時、家米に十手を持たせ、道を塞いで、

「ヤア老ぼれめ、いづくへ行く。逃ぐるとて逃がさふか」

と、追取り巻かれて『ハツ』と吐胸、『先も気遣ひ、こゝも遁れず』七転八倒心は早鐘、時に時つく如くなり。

「ヤアこいつ横道者。おのれに今日維盛が事詮議すれば、存ぜぬ知らぬと言ひ抜ける。そのまゝにして帰せしは、思ひ寄らず踏込まふため。この家に維盛匿ひある事、所の者より地頭へ訴へ、早速鎌倉へ早打ち、取る物も取り敢へず来たれども、油断の体はおのれを取り逃すまいため。サア首討つて渡すか、たゞし違背に及ぶか、返答せい」

と責めつけられ、叶はぬ所と胸を据ゑ、

「成程、一旦は匿ひないとは申したれども、あまり御詮議強き故、隠しても隠されず、はや先達て首討つたり。御覧に入れん、お通り」

と、伴ひ入れば母娘、

「どふなること」

と気遣ふ内、鮓桶引提げ弥左衛門、しづ〳〵出でて向ふに直し、

「三位維盛の首、御受け取り下されよ」

と、蓋を取らんとする所を女房駆け寄りちやつと押さへ、

「コレ親父殿、この桶の中にはわしがちつと大事の物を入れて置いた。こなさん開けてどふするぞ」

「オ、われは知るまい。この桶の中には、最前維盛卿のお首を入れ置いた」

「イヤ〳〵この桶にはこなたに見せぬ物がある」

と、引き寄すれば引き戻し、

「エヽおのれが何も知らぬ故」

「イヤこなたが知らぬ故」

と、妻は銀と心得て、争ひ果てねば梶原平三、

「さてはこいつら言ひ合はせ、縛れ、括れ」

と下知の下、

「捕つた〳〵」

と取り巻く所に、

「維盛夫婦餓鬼めまで、いがみの権太が生け捕つたり、討ち取つたり」

と呼ばはる声、『ハツ』とばかりに弥左衛門、女房娘も気は狂乱、いがみの権太はいかめしく、若君内侍を猿縛り、宙に引立て目通りにどつかと引き据ゑ、

「親父のが三位維盛を熊野浦より連れ帰り、道にて頭を剃りこぼち、青二才にして弥助と名を替へ、この間はイヤモほてくろしき聟詮索。生け捕つて面恥と存じたに、思ひの他手強い奴。村の者の手を借つて漸々と討ち取り、首にいたして持参。イザ御実検」

と差し出だす、

「ムヽ成程々々。剃りこぼち弥助といふは存じながら、先達て言はぬは弥左衛門めに、思ひ違ひをさそふため、聞き及んだいがみの権太。悪者と聞いたがお上へ対しては忠義の者、オヽ出かいた〳〵。内侍、六代、生け捕つたな。ハテよい器量。夢野の鹿で思はずも、女鹿子鹿の手に入るはあつぱれの働き。褒美には親の弥左衛門めが命赦してくれふ」

「アヽイヤ〳〵申し、親の命位を赦して貰はうと思ふて、この働きは致しませぬはい」

「スリヤ親の命は取られても、褒美が欲しいか」

「ハテ、あのわろの命はあのわろと相対。私にはとかくお銀」

と願へば梶原、

「ハヽヽヽヽヽハテ小気味のよい奴。褒美くれん」

と着せし羽織、脱いで渡せば仏頂面、

「アヽコリヤ〳〵、その羽織はくも頼朝公のお召し替へ。何時でも鎌倉へ持ち来たらば、金銀と釣り換へ、嘱託の」

と聞くより戴き、

「出来た〳〵。当世衒りが流行るによつて、二重取りをさせぬ分別。よふしたもの」

と引き換へに、縄付き渡せば受け取つて、首を器に納めさせ、

「コリヤ権太、弥左衛門の奴等、暫く汝に預くるぞ」

「イヤモ、お気遣ひなされますな。貧乏ゆるぎもさせませぬはい」

「ハテさて健気な男め」

と、誉めそやして梶原平三、縄付き引立て、立ち帰る。

「アヽこれ〳〵、そのついでに褒美の銀、忘れまいぞ」

と見送る隙間、油断見合はせ弥左衛門、憎さも憎しとひん抱へ、ぐつと突込む恨みの刃、『うん』とのつけに反りかへる、見るに親子は『ハア、ハツ』と、憎いながらも悲しさの、母は思はず駆け寄つて、

「コリヤ天命知れや不孝の罪、思ひ知れや」

と言ひながら、先立つものは涙にて、伏し沈みてぞ泣きゐたる。弥左衛門歯噛みをなし、

「ヤア泣くな女房何吠えるのぢや。不憫なの可愛いのと言ふて、こんな奴を生けて置くは、世界の人の大きな難儀ぢやはい。門端も踏ますなと言ひつけ置いたに内へ引き入れ、大事の大事の維盛様を殺し、内侍様や若君をよふ鎌倉へ渡したな。モヽヽヽもふ腹が立つて腹が立つて、涙がこぼれて胸が裂くるわい。三千世界に子を殺す、親といふのはおればつかり、あつぱれ手柄の因果者に、よふしをつた」

と抜き身の柄、砕くるばかりに握り詰め、ゑぐりかけるも心は涙、いがみにいがみし権太郎、刃物押さへて、

「コレ親父殿」

「エヽなんじやれ」

「こなたの力で維盛を助ける事は、叶はぬ〳〵」

「コリヤ言ふなやい〳〵。今日幸ひと別れ道の傍らに手負の死人、よい身代りと首討つて戻り、この中に隠し置く。コリヤこれを見をれ」

と、鮓桶取つて打ち明くれば、がらりと出でたる三貫目、

「ヒヤア、こりや銀ぢゃ、こりやどふぢや」

と、呆れ果てたるばかりなり。手負は顔を打ち眺め、

「おいとしや親父様、私が性根が悪さに御相談の相手もなく、前髪の首を総髪にして渡さふとは、了簡違ひの危ない所。梶原程の侍が、弥助といふて青二才の男に仕立てあることを、知らいで討手に来ませふか。それと言はぬはあつちも工み。維盛様御夫婦の路銀にせんと盗んだ金、重いを証拠に取り違へた鮓桶、開けてみたれば中には首、『ハツ』と思へどこれ幸ひ、月代剃つて突き付けたは、やつぱりお前の仕込みの首」

「ム、そのまた根性で、御台若君に縄を掛け、なぜ鎌倉へ渡したぞ」

「ホヽそのお二人と見へたのは、この権太が女房、伜」

「ヤア、シテ〳〵維盛様御夫婦、若君はいづくに」

「オヽ逢はせませふ〳〵」

と、袖より出だす一文笛、吹き立つれば、折よしと維盛卿内侍は茶汲みの姿となり、若君連れて駆け付け給ひ、

「弥左術門夫婦の衆、権太郎へ一礼を。ヤア手を負ふたか」

と驚くも、

「お変りないか」

とびつくりも、一度に興をぞさましける。母は悲しさ手負に取り付き、

「かほど正しき性根にて、人に疎まれらるゝ、身持ちはなぜにしてくれた。常が常なら連れ合ひが、むさと手疵も負はせまい、むごい事を」

とせき上げて、悔み嘆けば権太郎、

「ヤレそのお悔み無用々々。常が常なら梶原が、身代り喰ふては帰りませぬ。まだそれさへも疑ふて、親の命を褒美にくれふ、忝ないと言ふと早や、詮議に詮議をかける所存。いがみと見た故油断して、一杯喰ふて帰りしは、禍も三年と、悪い性根の年の明き時。生まれついて勝負に魂奪はれ、今日もあなたを廿両、騙り取つたる荷物の内に、うや〳〵しき高位の絵姿、弥助が顔に生き写し。合点がいかぬと母人へ、金の無心を囮に入り込み、忍んで聞けば維盛卿。御身に迫る難儀の段々、この度根性改めずば、いつ親人の御機嫌に預る時節もあるまいと、打つてかへたる悪事の裏。維盛様の首はあつても、内侍若君の代りに立つ人もなく、途方にくれし折からに。女房小仙が伜を連れ、『親御の勘当、へ忠義、何うろたへる事がある。私と善太をコレかう』と、手を廻すれば伜めも、『母様と一緒に』と、共に廻して縛り縄、掛けても掛けても手が外れ、結んだ縄もしやら解け、いがんだおれがな子を、持つたは何の因果ぢやと、思ふては泣き、締めては泣き、後ろ手にしたその時の、心は鬼でも蛇心でも、堪へ兼ねたる血の涙、可愛や不憫や女房も、わつと一声その時に、コレ血を吐きました」

と語るにぞ、力み返つて弥左衛門、

「エヽ聞こえぬぞよ〳〵権太郎。孫めに縄を掛ける時、血を吐く程の悲しさを、常に持つてはなぜくれぬか。広い世界に嫁一人、孫といふのもあいつ一人ぢやはい。子供が大勢遊んでゐれば、親の顔を目印に、苦味の走つた子があるかと、尋ねて見ては、『コレ〳〵子供衆、権太が息子はゐませぬか』と、問へど子供は、『どの権太、家名はなんと』と尋ねられ、おれが口から満更に、いがみの権、とは得言はず、悪者の子ぢや故に、はね出されてをるであらふと、思ふ程猶そちが憎さ、今直る根性が半年前に直つたら、ノウ婆」

「親父殿、嫁女や孫の顔見覚へて置かふのに」

「オヽおれもそればつかり」

とむせ返り、

「わつ」

とばかり伏し沈む、心ぞ思ひやられたり。

悔みに近き終り際、維盛卿も、

「これまでは仏を衒つて輪廻を離れず、離るゝ時は今この時」

と、ふつつと切り給へば、内侍若君お里は縋り、

「共に尼とも姿を変へ、御宮仕へを赦して」

と、願へど叶はず打ち払ひ〳〵、

「内侍は高雄のへ、六代が事頼まれよ。お里は兄になり代り、親へ孝行肝要」

と、立ち出で給へば、弥左衛門

「女中の供は年寄の役」

と諸共旅用意、手負を労はる母親が、

「ノウ、これつれない親父殿、権太郎が最期も近し、死目に逢ふて下され」

と、留むるにせき上げ弥左衛門、

「エヽ、現在血を分けた伜を手に掛け、どふ死目に逢はれふぞ。死んだを見ては一足も歩かるゝものかいの。息ある内は叶はぬまでも、助かる事もあらふかと、思ふがせめての力草、留めるそなたが胴慾」

と、言ふて泣き出す父親に、母は取り分け娘は猶、

「不憫々々」

と維盛の、首には輪袈裟手に衣、手向けの文も、三菩提の門出、へ引き分くる夫婦の別れに親子の名残り、手負は見送る顔と顔、思ひはいづれ大和路や、吉野に残る名物に、維盛弥助といふ鮓屋、今に栄ふる花の里、その名も高く顕せり。